

国際大会参加報告——IMS、IAML での発表を終えて

山本宗由 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程（音楽学）

本稿は、筆者が 2017 年に発表を行った、国際音楽学会（以下、IMS）および国際音楽資料情報協会（以下、IAML）での大会報告である。

1. 国際音楽学会（IMS）

2017 年 3 月 19 日（日）から 23 日（木）にかけて、東京藝術大学において第 20 回 IMS 東京大会が行われた。IMS は 1927 年に創設された国際学会であり、5 年に 1 度のペースで国際大会が開催されている。創設 100 年目にあたる記念すべき今回の大会は東京で行われることとなり、これはアジアで開かれる初めての IMS の大会でもあった。

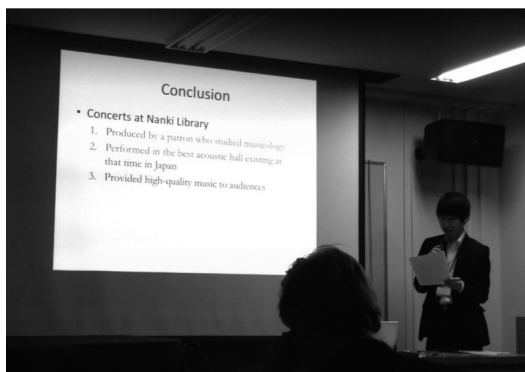
テーマは「音楽学：東西の理論と実践」と題され、国内外から大勢の参加者が参加していた。会期中は毎日演奏会も催され、西洋音楽ではバロック音楽から現代音楽、東洋音楽では雅楽から唐楽など、テーマにふさわしい多様なプログラムが組まれていた。

発表内容について述べる前に、簡単に今回発表することになった経緯を述べたい。今回発表するにあたり、2016 年 1 月に要旨を作成し、応募したが、6 月に届いた査読結果は不可であった。そのため、次項で述べる IAML での発表へとシフトしたのであるが、事態が変わったのは年明けの 2017 年 1 月のことであった。修士論文の提出を目前にしているところに、IMS の事務局からメールが入り、キャンセルになった発表者の代わりに発表してもらえないかとのことだった。突然の出来事であった上、当初 IMS で発表予定だった題目については IAML で発表することが決まっていたため、特別に題目を変更する許可を得て、急遽 IMS で発表を行うことになった。

筆者が発表したのは 21 日（火）の 14 時から 15 時半の枠で行われたセッション（FP-5D「Editions, Collections, Catalogues」）であった。発表題目は「A

Preliminary Study of Nanki Library's Concerts」とし、筆者の修士論文である「南葵音楽文庫¹の源流考——南葵楽堂における演奏会を中心に」をまとめた内容を発表した。同時に他の部屋でも数多くのセッションが行われていたため、聴衆がどれほどいるのか予想できなかったが、実際は30人余りほどで、部屋がおおよそ埋まるほどであった。南葵音楽文庫という国内のテーマを扱ったものであったが、予想以上に海外の音楽学者からも注目されていることに驚いた。

20分の口頭発表の後、10分の質疑応答の時間がとられていた。質問に関しては、筆者の説明不足からか、基本的な南葵音楽文庫の所在や組織構成などの質問があり、これについては反省点であった。また、南葵音楽文庫の所蔵していた資料についての質問もあり、本発表の主旨とは異なるものであったが、これについては予想の範囲内であった。一方で、発表を通して得られた収穫もあった。本発表のテーマである南葵楽堂での演奏会について、同時期に日本にいたプロコフィエフとの関係を指摘され、筆者の注目していなかった視点からのご意見をいただいた。発表後には関連資料などの紹介も受け、実りある発表とすることができた。



筆者による発表の様子

2. 国際音楽資料情報協会 (IAML)

2017年6月18日(日)から22日(木)にかけて、ラトビアの首都リガにあるラトビア国立図書館において、IAML リガ大会が行われた。IAMLでは毎年各地で国際大会が行われており、音楽ライブラリアンや音楽図書館学者など、音楽図書館を中心とした関係者が集まる場となっている。ラトビアで大会が開かれるのは初めてのことであり、そのこともあってか会場のスタッフの方々は非常に丁寧に対応してくださった。

発表の内容に移る前に、少しラトビアという国について紹介したい。筆者にとって、ラトビアという土地はまったくの未知であった。出国前は、身近に訪れたことのある人もおらず、ガイドブックなどもほとんどないためほとんど情報が得られない状況であった。また、ラトビアの通用語はラトビア語であるが、日本語で書かれたラトビア語の語学本なども、調べた限りでは2冊しか見つけることができないような状況であった。

そんな状況の中訪れたラトビアという国であったが、首都であるリガについて述べれば、予想以上にすばらしい場所であったと振り返ることができる。まず、観光地化がそれほどされていないため、治安のよさを伺うことができた。また、各地でWi-Fiが完備されており、街中で行動するにはまったく不自由さを感じることがなかった。各所には歴史的な建造物も残されており、リガの大聖堂を始めとして、貴重な文化遺産にもふれることができた。

発表を行うことになった経緯については、前項でも述べた通り、IMSで発表する予定のものを、ポスター発表の形式で応募したことによるものであった。2016年11月に応募し、年末に査読結果が届き、無事発表できることとなった。

筆者が発表を行ったのは、20日(火)の10時半から行われたポスターセッションにおいてであった。発表題目は「Nanki Music Library: a multifaceted institution」とし、南葵音楽文庫の多様な活動を整理した上で、同文庫が音楽図書館という枠組みに収まらない音楽機関として機能していたことを発表した。

今回はポスターでの発表であったため、決められた時間にポスターの前に立って、通りがかる人に向けてプレゼンをする形であった。IMSでの発表とは違い、行き交う人々と世間話をするような間隔で意見交換ができたため、楽し

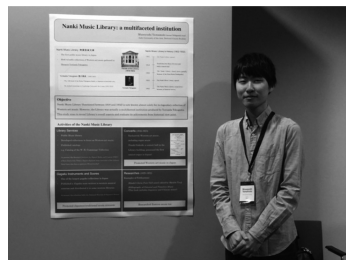
む余裕を持ちながら発表を行うことができた。ポスター発表の場合、口頭発表と違い事前の口述原稿などは用意できないのだが、会話の気安さから、IMSの時よりも自然に発表することができた。

3. 結び

短期間に英語での口頭発表とポスター発表を経験することができ、失敗も含め多くのことを学ぶことができた。今回は、どちらも発表するだけで精一杯であったが、この経験を活かして、今後は海外の研究者とも有益な情報交換ができるような発表ができるように努めたい。

[注]

- ¹ 南葵音楽文庫は、1918年に創設された日本初の音楽専門図書館。西洋音楽に関する貴重資料を多数所蔵していたことから、専門家の間では国内外において認知されている。



ポスターと筆者



会場となったラトビア国立図書館